

見立てる

「見立て」とは、アセスメントともいわれ、対象となる子どもの状況を理解し、どのような指導・支援をするのが望ましいか見通しを持つことです。子どもの実態や特性を的確に“見立てる”ことは生徒指導の基盤です。ここでは、サインに気付き、情報を集めて見立てを行うまでのポイントをまとめています。

Point 1 サインに気付く ～教職員の観察力が鍵～

子どもたちが普段見せない姿を見せるようになったら、それは何らかのサインです。子どものサインを見逃すことなくきちんと受け止める必要があります。また、他の教員や保護者から指摘されたり相談されたりして気付く場合もあります。様々な活動場面で多くの人の目で見つめることが大切です。

●子どもからの様々なサイン●

目に見えにくい子どもの変化にも気を配ることが大切です。



Point 2 情報を集める ～多面的にとらえる～

子どものサインに気付いたら、その背景にある要因にも目を向けましょう。表面上の問題に対応するだけでは課題の解決にはなりません。様々な情報を収集して、多面的に子どもの実態をとらえることが大切です。

その際、「個人の要因(特性)」と「環境の要因(学校、家庭など)」(右ページに上げた視点)から情報を集めておくことが的確な見立てにつながります。

●多くの人から●



●様々な場面で●

登校時、授業中、昼休み、清掃活動、特別活動、部活動、下校時、学校外の生活など様々な観察できる場面があります。

●様々な方法で●

観察

面接

質問紙

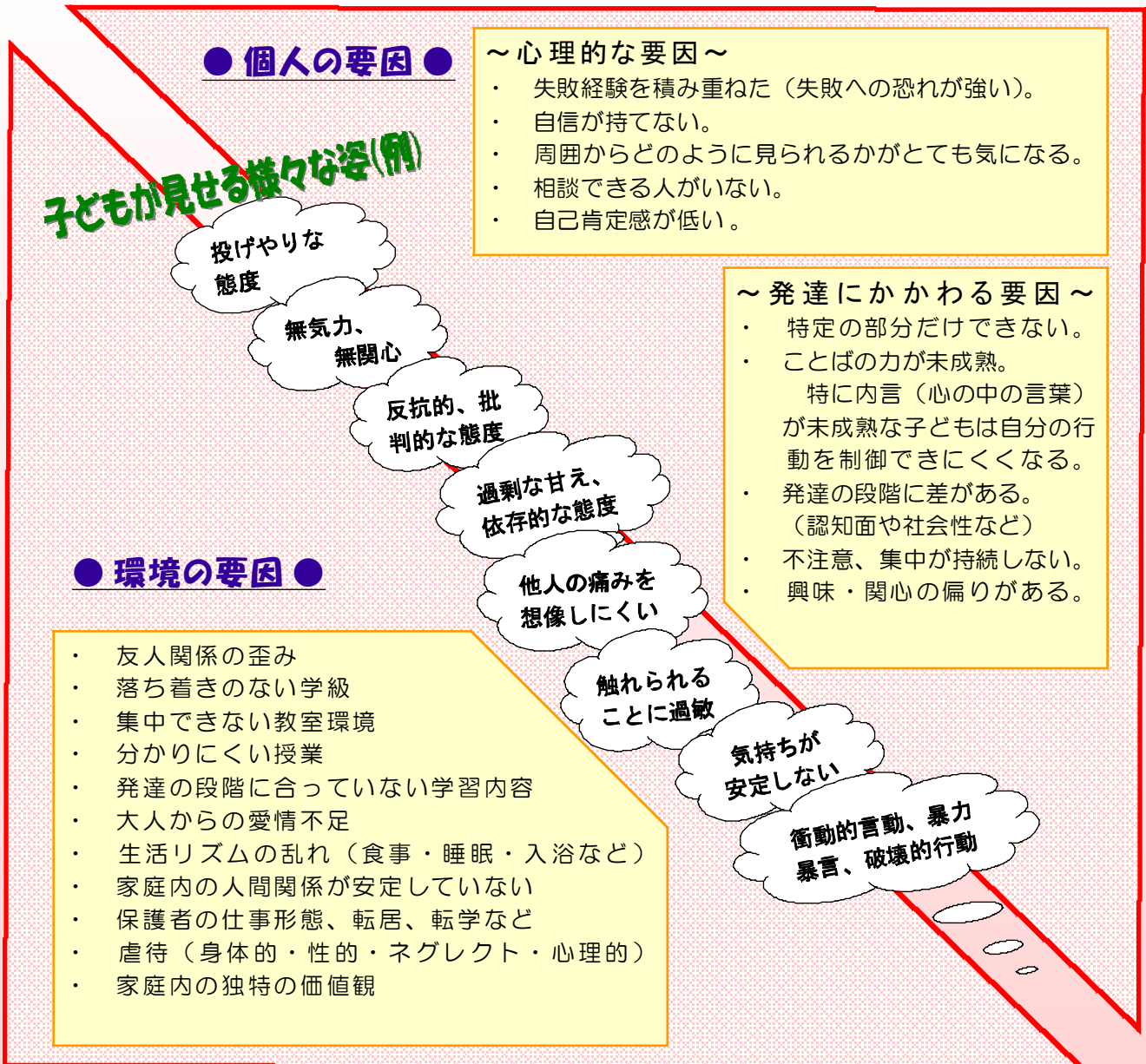
検査

事例研究

※ 先入観や思い込みは避けましょう。できるだけ多角的・多面的でかつ客観的な情報を得るように努めます。
※ 間違った行動ばかりでなく、正しい行動にも目を向け、できた要因を見付け出すようにします。

Point 3 的確に見立てる ～適切な支援のために～

子どもの行動には、いくつかの要因が絡み合っていることがあります。様々な可能性を考えて、複数の教員で情報を共有し、ケース会議で的確に見立てて個別の指導計画を作成することが大切です。



個人の要因と環境の要因の両面から考えていくことが大切です。

特別支援教育の視点から

発達障害のある子どもは、物事の見方、とらえ方、感じ方などに他の子どもとは少し違う特性があります。故意に不適切な行動を取るのではなく自分の気持ちや行動をコントロールしきれずに無意識にとった行動が、結果として問題となる行動につながってしまうことがよくあります。

特性を理解されない子どもは、周囲から誤解を受け、自己肯定感が低下し、二次的な障害につながります。

子どもの変化に気付いたら、時を移さずチームで「見立て」を行い、ニーズに応じた支援を始めることが大切です。適切な対応により、課題克服が図られ二次的な障害も防止することができます。また、支援のプロセスは、PDCAのサイクルで行い、終結まで継続させます。（「校内でつながる」P5参照）